様式２

令和５年度　不登校支援研究校　報告書　広島市立祇園中学校

１　学校の課題

※データ等を基にした学校の課題

本校は、生徒数約１200人の過大規模校であり、今後、更に増え予想である。入学時や年度ごとのクラス替え時の新しい人間関係づくりにも大きな課題が出てきている。生徒数が多すぎることに加え、昨今の子どもたちは、上手なコミュニケーションの取り方が分からず、人間関係がうまくつくれなかったり、トラブルを起こしてしまったりすることが多い。また、集団に溶け込むことが難しい生徒、発達的な課題により、その特性から自己を制御することが難しくうまく関わり合えない生徒も増えてきている。このような学校実態や時代背景から、「ライフスキル教育」を効果的に実施することで、他者とうまく関わり合う方法を学び、人間関係づくりを円滑に行えるようにしたい。また、多様性を認め合える学級づくりや、成功体験を通して学級へ定着し学級が居場所となることが不登校の未然防止にもつながると考える。 さらに、お互いの命を大切にするという観点から、昨年度より実施しているMLB教育を更に充実させ、生徒の自己肯定感を高め、自己も他者も大切にしていく気持ちを育てたいと考える。

また、本校には不登校の未然防止の場であるＧルームと不登校生徒を支えるふれあいひろばの二つの場所がある。この不登校生徒を支えるシステムをさらに充実させ、不登校生徒の居場所としていきたい。これらの課題を解決していくために以下の三点の向上について取り組みを進めていきたいと考えている。

ア　生徒指導体制

担任をはじめとする全教職員が生徒指導の基本的な考え方や指導方法を話し合い、共通理解のもとに実践しようとしている。また、昨年度は生徒理解研修を年間4回行い、生徒理解の視点の一つとして、家族の状況を踏まえて生徒を理解することを共通認識することができた。しかしながら学校規模の拡大により、一学年の学級数が10～12クラス（一学年の生徒数約400人）に達し、学年内の情報共有も難しい状況になっている。多様な価値観が表出している現在、様々なタイプの生徒・保護者への対応を迫られる場面が増えている。また、増え続ける不登校生徒の特性や背景を知り、理解し、よりよい支援のあり方を考え対応していく必要がある。そのため、新年度も引き続き、校内研修会の機会を意図的、継続的に持ち、教職員自ら研鑽に努めていかなければならない。また、全教職員の役割分担や連携の在り方を明確にし、計画的・組織的に進めることが必要である。本校では、不登校生徒の未然防止のための場所としてＧルームを設置している。全市的に不登校生徒のための居場所として「ふれあいひろば」が全日開室となり、不登校の生徒への支援体制を未然防止と居場所づくりのための両方から支えるシステムができつつある。このシステムを学校全体で共有し、推進していく組織づくりを引き続きすすめていく必要がある。

イ　生徒の資質の向上

本校の「めざす生徒像」のうちの一つは「お互いに認め合い、理解し、高め合うことができる生徒」である。めざす生徒像を実現していくためには、生徒一人ひとりが自己有用感を高め自らの課題を解決していくこと、それと同時にお互いを認め合い、理解し、高め合えるような関係づくりを仕組んでいく必要がある。

ハイパーQUの「配慮」と「かかわり」の項目を比較した。全体で「配慮」と「かかわり」の項目の肯定的評価が上昇した生徒の割合は全体の65%である。「配慮」の項目についての肯定的評価は、１年生は9項目のうち8項目、2年生は9項目のうち5項目、3年生は9項目のうち8項目が上昇している。特に、すべての学年で上昇した項目は、「友人の気持ちを考えながら話をしている」「ケンカをした時自分に悪い点がなかったか考えている」「自分がしてもらいたいことを友人にもしてあげている」などが挙げられる。他者と関わる中で相手の気持ちを考えながら接することができるようになった生徒が多くいる。

「かかわり」の項目についての肯定的評価は、１年生は9項目のうち6項目、2年生は9項目のうち7項目、3年生は9項目のうち6項目が上昇している。特にすべての学年で上昇した項目は、「みんなと同じくらい話をしている」「みんなのためになることを自分で見つけ実行している」「友人が楽しんでいるときに盛り上げ

ている」が挙げられる。「みんな」や「友人」と前向きなかかわりをしている生徒が増えていることが分かる。これらのことから、まずは生徒一人一人にコミュニケーションスキルを習得させるため、学校教育の場で意図的に関わり合う場面を作り生徒同士のコミュニケーション能力を高めていけるようなライフスキル教育を充実させることが必要である。

また、生徒の課題が多様化し、他者を受容できない生徒、他者を理解することが難しい生徒も増えているため、まずは自己を肯定し、そこから他者を認めることができる素地をつくっていきたい。自分を大切にできないと他者を尊重することはできないと考え、自己受容ができる生徒を増やしていきたい。これらの取り組みを通して、自分の居場所が学級であると思える生徒を増やし、不登校の未然防止につなげる。

ウ 教師の資質の向上

教師は、個への働きかけと集団への対応をそれぞれを実践できなければならない。本校のめざす教師像のうちの一つは「生徒の成長のために努力し、向上心を持ち続ける教師」である。現代社会では生徒自身の課題、あるいはその家庭環境が多様化している。そのような生徒によい変化を起こすためには教師の対応の仕方が重要である。課題に応じた対応ができるような研修を重ねスキルアップしていく必要がある。

個への対応については、教育相談の意義や目的を理解し、生徒のため教育相談の技術のスキルアップをはかっていく。集団への対応については、主にライフスキル等を活用し、学級活動を通じて、生徒一人ひとりが自己有用感を持てるような学級づくりをすすめられる教師の資質向上が求められる。

２　研究主題

「生徒一人一人の居場所づくり」
～小中学校の9年間を見通した学習支援と温かな人間関係の構築

３　重点取組

※１の課題解決に向け、重点的に取り組む項目

（1）不登校（傾向）生徒への支援体制の確立
（2）中学1年生を中心としたいじめ･不登校等予防的生徒指導の実践
（3）不登校支援のための小中連携の実施

４　具体的な取組

※３の具体的な取組

（１）不登校（傾向）生徒への支援体制の確立

①ふれあいひろば・Ｇルームの連携による学習支援

本校では登校を継続することを主な目的とする「ふれあいひろば」と具体的な目的を持って利用する不登校の未然防止のための教室である「Ｇルーム」の両方を設置している。今年度はふれあいひろば利用し、学習意欲がある生徒がＧルームへ通い継続的な学習をおこなった。まず初めに、ふれあいひろば利用生徒に「学習に関するアンケート」を行った。このアンケートは、３年生はすべての教科について、１，２年生は今頑張りたいと思っている教科について、どのようにがんばりたいかを問うものである。このアンケートをもとに、Ｇルームの利用の希望の有無などを把握し、それぞれの生徒に対する学習支援の手立てを考えていった。例えば、１年生からの学びなおしをしたいという希望を持つ３年生にはＧルームを利用しての学習支援、入学後すぐ教室に入れなくなった１年生の生徒にはＧルームでの小学校の内容も含めた数学、英語の学習を行った。

②ふれあいひろばでの学習支援

ふれあいひろばでは、いかに意欲をもって生徒が学習することができるか、様々なニーズに合わせて学習機会を捻出し、以下の三つの取り組みを行った。

一つ目は午後のふれあいひろば開室を担当する教諭が不登校支援担当教諭と入れ替わり午前中の空き時間に行う学習支援の実施である。主に３年生の英語、理科で行った。３年生ともなると学習内容の難易度が増しているため、一人で行うことが難しい課題が多いが、それらに取り組み提出することができた。

二つ目は、植物を育てることに関心がある生徒を対象にベランダで野菜を育てた。野菜の世話をすることを目的に登校できた生徒もいた。

その他には、広島 LEARN プロジェクトの活用があげられる。オンライン修学旅行やアクアス探検、みらい創生高校の生中継など様々なプログラムがあり、それぞれに関心のある生徒が参加して楽しんだり、交流したりすることができた。

その他にも技術・家庭科のラジオの製作や調理実習、音楽の歌唱や鑑賞など実技教科の教科担当による授業や、生徒の方から「リクエストカード」を使い、教科担当の先生に教えてもらう機会を作るなど生徒のニーズに合わせた支援を数多く行うことができた。

③ふれあいひろばでのコミュニケーションスキル習得のための支援

主に４時間目に設定している「ふれあいタイム」の中で主に２つの取り組みを行った。

一つ目は広島経済大学の学生との交流である。週に２回程度ボランティアで学生が２名訪問している。生徒と年齢も近い学生たちが、「カタカナーシ」「ウノ」「トランプ」といったゲームを行った。

二つ目は担当教諭によるソーシャルスキルトレーニング（SST）である。ふれあいひろばに通っている生徒の課題を把握していく中で「自分の気持ちを表現することが苦手」な生徒がいることが分かった。そこでまず「気持ち探しゲーム」を行い、自分の気持ちを表す言葉がたくさんあることを確認した。次にコグトレを利用し、絵を見ながらその絵の人の気持ちを類推するという SST を行った。さらに、絵が得意な生徒が描いたイラストをみんなで見ながら、その絵の人物の気持ちを考え、共有し絵のタイトルをつけるという SST も行った。

教員主導 SST の他に、３年生の生徒主導でゲームを行うという試みも行った。受験が終わった３年生生徒に、みんなでコミュニケーションを取ることを目的とするふれあいタイムの運営を任せることを伝え、アイディアを出させた。その生徒は自作のすごろくを行うことを企画し、自分たちで計画的にすごろくを作り、当日その時間にふれあいにいた生徒全員を誘い楽しく時間を過ごすことができた。

また、進路について不安や悩みを抱える生徒のために、ふれあいひろばを利用していた生徒でみらい創生高校に進学をした卒業生に来てもらい、「卒業生と語る会」を行った。座談会方式で堅苦しくない雰囲気で行うことができた。受検をまじかに控えた生徒は実際に通学している高校生に質問し確かめることで安心している様子であった。

④情報共有の機会の充実

情報共有の場として、隔週で行うコンサルテーション会議と、７月、１２月におこなうふれあい担任会を設定した。

コンサルテーション会議は、スクールカウンセラーや養護教諭等校内の様々な立場や専門的な見地から具体的な方策について意見をもらった。その中で、ジェノグラムを確認しながら生徒の状況を把握しケース会議につなげていくこともできた。

ふれあい担任会では、ふれあいひろば推進員にも参加していただいて三者懇談会前に情報共有をすることができた。また、担任がどのような関わりをしているか、保護者の思いなど若い教員にとっては研修の場にもなり得る機会となっている。

⑤個別の支援計画の作成

昨年度に引き続き個別の支援計画を作成し共通理解のもと支援を行った。合わせてふれあい独自のアンケートや、学期ごとの目標設定のプリントなどもファイリングし、担任と共有することで生徒理解に役立てた。ふれあい担任会でファイルを返却し、その後の三者懇談会を経てそこまでの取り組みを見直し評価し、新たに次のターンの支援計画を立てファイルを担当教諭に返却し共有するという流れができつつある。このファイルを次年度に新しい担任に渡すことで申し送りの一つになると考えられる。

⑥保護者支援

不登校の生徒を支える保護者はしんどさを抱えている場合が多く、その気持ちを共有する場がなく、さらにしんどい思いが増幅されていることが少なくない。そういった保護者を支える支援として、年間３回の「不登校・ふれあいひろば保護者懇談会」を行っている。１回目は、自己紹介を含む悩みの共有、２回目はスクールカウンセラーによる「家庭での子どもとの関わり方」、３回目は本校の進路指導主事による「進路選択について」である。毎回１０名前後の保護者が参加してくださり、「この会がモチベーションになっている」と言われる方もいる。保護者どおしのつながりもできており、こうした機会の必要性を感じている。

また、ふれあいひろばでの三者懇談会の実施及び担任だけでなくふれあいひろば担当教諭も同席する懇談も行っている。ふれあいひろばに登録している生徒も毎日コンスタントに利用している生徒と長い間登校できていない生徒に大きく分かれる。毎日登校している生徒は主にふれあいひろばでも三者懇談を実施しふれあいひろば推進員からも様子を伝える機会を持っている。久しぶりに会う生徒とは教室での懇談に参加させていただき、担任の先生と一緒に次の目標の確認などを行っている。

⑦校内研修会の実施

生徒理解研修を４回行った。そのうち２，３回はスクールカウンセラーによるものである。

２回目の「アセスの概要と分析の方法について」では、今年度から導入したアセスの読み取りと分析の方法について具体的に本校生徒の１回目のアセスの結果を見ながら行いアセスの活用に向けて示唆を得ることができた。

回	内　　容
１	年度初めの生徒の情報交換
２	アセスの概要と分析の方法について
３	家族の背景から生徒を理解する
４	来年度入学の特別支援学級生徒の情報共有

３回目の「家族の背景から生徒を理解する」

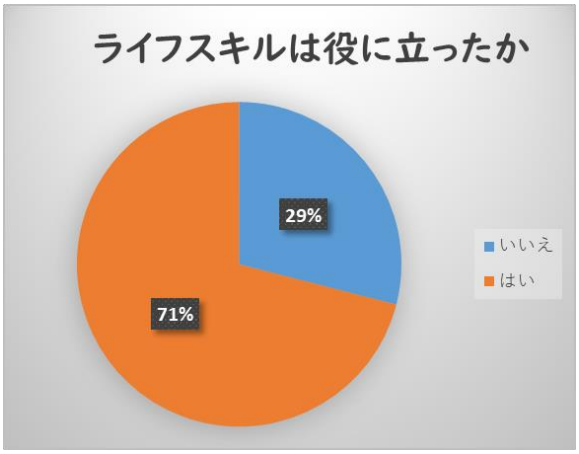
という内容では、昨年度の研修アンケートで本校の事例をもとに研修を行いたいという先生方の希望を取り入れ、実際の本校１年生の事例をもとに家族の背景を理解しながら支援の方法を考えるという演習を行った。研修後のアンケートでは、「家族構成を知るだけで色々な可能性を想定できるんだなと勉強になった。担任の先生の聞き取り力がすごい。この内容の研修はこの学校で初めて受けたがとても勉強になる。」や「何かしらの問題行動がある生徒に対して家庭環境や育成歴などの背景に目を向ける姿勢を意識づける有意義な会だったと思います。」など生徒を理解する新しい視点を得たという意見が多かった。

（２）中学１年生を中心としたいじめ・不登校等予防的生徒指導の実践

①ライフスキル教育の実施

今年度も学活の時間を活用し、各学年において計画的にライフスキル学習を行った。

１年生	２年生	３年生
上手な聴き方	よりよい決定をする１･2（２時間）	上手な断り方
君はどこかでヒーロー（2時間）	君はどこかでヒーロー（２時間）	君はどこかでヒーロー（２時間）
SNS で上手に コミュニケーションするスキル	私の四面鏡	私の四面鏡
夏の思い出	夏の思い出	ストレスに対応するスキル
あなたがいてくれたから （合唱コンの振り返り）	あなたがいてくれたから （合唱コンの振り返り）	あなたがいてくれたから （合唱コンの振り返り）
みんなでリフレーミング	MLB 教育	SGE「月世界」
怒りのコントロール		
MLB 教育		



昨年度実施した際、やはり１年生に必要な学習であるということが分かり、１年生での実施時間数を多く設定した。学年を超えて共通して行うことが効果的であるものは繰り返し行った。また、行事のふりかえりの場面でライフスキルの手法を取り入れるなどの工夫もした。

ライフスキル学習の最後の時間にアンケートを行った。「ライフスキル学習は自分の役に立ちましたか」という問いには「はい」と答えた生徒が７割いた。さらに、「どのライフスキル学習が自分の役に立ったと感じましたか」という問いには、「みんなでリフレーミング」や「怒りのコントロール」を挙げた生徒が多かった。その理由として、リフレーミングに関しては「ネガティブだけで考えてしまうことがある日があるし、それだけで気分が下がる日もあったりするので、この学習を通して、少しでもポジティブに考えて見ようと感じることができたから」や「リフレーミングをすることで短所しかない人はいないと感じたから」など、自分のことや他者のことをプラスに捉える新しい視点を手に入れることができたとする意見が多くあった。また、「怒りのコントロール」に関しては「怒っている時の対処法が身についたし喧嘩して仲が悪くならない方法がわかったから」や「怒りのコントロールができるようになると、人間関係がうまくできるようになるし、怒り以外のコントロールもできるようになると思うから」などの感想があった。

自分に足りないスキルを身に付けることで自分を理解し他者とのコミュニケーションを円滑にとることができるスキルを引き続き身に付けていくことが必要である。

②教育相談・生活アンケート・アセスによる生徒の把握

今年度は全員が行う教育相談を２回、生活アンケートは毎月、アセスは６月と１１月の２回行った。細かく生活アンケートを行うことで生徒の最新の状況を把握することに努めている。不安感の有無や内容、ヤングケアラーの可能性を探るなど、継続して聞いていきたい質問事項とその時期ごとに把握しておきたい内容の両方について聞けるような内容になっている。また、教育相談は、担任はもちろんそれ以外の教師やスクールカウンセラーとの相談の希望の有無を示すことができるようにしている。これにより、生徒の状況や実態に応じて様々な相談窓口を示すことができている。アセスについてはタブレットを使い効率よく実施することができた。

（３）不登校支援のための小中連携の実施

今年度、祇園小学校も不登校支援研究指定校に指定されたことを受け小中連携を行っていくこととした。その中で取り組んだことは主に三つである。一つ目はライフスキル教育の共有である。本校で行っているライフスキル教育の指導案等を提供し、小学校でもライフスキル教育の計画を作った。小中９年間を見通した内容にしている。

二つ目は、月に一回程度行っている小中生徒指導主事会への参加である。中学校区の各小学校のふれあいひろばの利用状況や不登校生徒の情報共有をおこなった。

三つめは、担当教諭の連携のための交流訪問である。お互いのふれあいひろばの状況を把握するために、それぞれの学校に３時間程度滞在し状況を観察することを行った。１０月に小学校を訪問し、１２月に中学校へ来校してもらった。人数や支援の方法、雰囲気も異なり課題も違うことを感じた。担当教諭だからこそ分かる苦労なども共有し有意義な機会となった。

５　検証結果

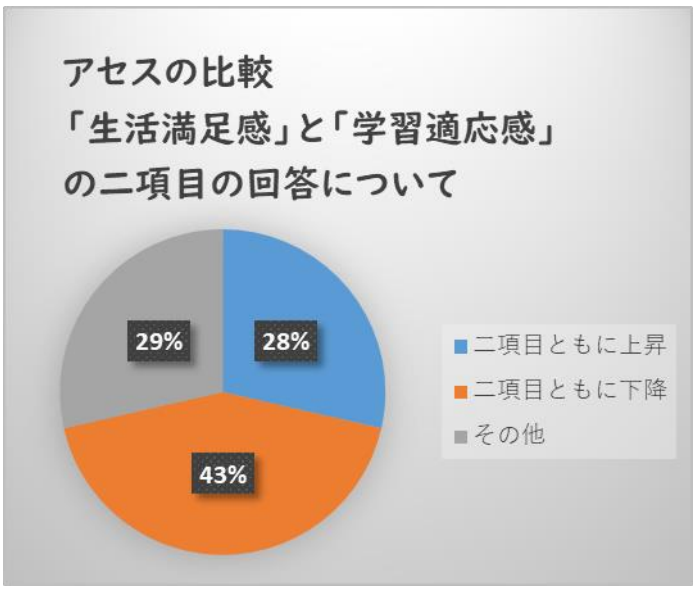
指 標	達成目標	検証時期･方法
①アセスのポイント	「生活満足感」が低く「学習適応感」が低い生徒の適応の上昇	年度末
②学校評価アンケート	生徒指導に関する項目の評価オールＡ	８月と12月生徒アンケートを比較
③生活アンケート	「学校は楽しいか」の項目の肯定的評価の向上	年度初めと終わり「学校は楽しいか」の項目の比較
④ふれあいひろば･Ｇルームの利用アンケート	「居場所になっている」の項目の肯定的評価80%以上	年度末
⑤「生徒理解」に関わる教師の研修会の実施回数	年間４回以上実施	年度末

（１）検証方法

①アセスを利用した分析

本校は、昨年度はハイパーQU を用いていたが今年度からアセスを実施した。計画書の段階でアセス（適応感尺度）を指標の一つとして加えたが、アセスは個々や学級単位の適応感の変化をみとることはできるが、学年集団全体の見取りを行うことは難しかった。そこで、計画書にある達成目標ではなく、1年生の各クラスの生徒のうち、他者とのコミュニケーションが苦手で学校への適応感が低いと各担任が感じた生徒の変化をみとることにした。

学年で選んだ生徒のアセスの「生活満足感」と「学習適応感」の二つの項目に注目した。その両方が上昇している生徒の割合は28%、両方が下降している生徒の割合は43%であった。ともに上昇している生徒のアセスの他の項目の変化を見ると、対人的適応の項目のいずれかが上昇、もしくは横ばいである生徒が多かった。これらの生徒のライフスキル学習の振り返りを見るとすべての生徒がライフスキルは自分の役に立ったと答えている。特に「みんなでリフレーミング」「怒りのコントロール」が役に立ったとあげた生徒が多かった。ライフスキル学習などに前向きに取り組む姿勢がうかがえる生徒は学習への取り組みにもプラスの影響が出ていると捉えることができる。

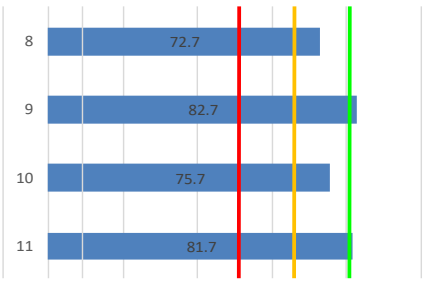


逆に下降している生徒はライフスキルについて「役に立ったか」の項目が空欄の生徒が目立つ。これらの生徒が前向きに学習に取り組めるようにそれぞれのアセスの項目に注目し、何が必要なのかを個別に分析しながらアプローチしていくことが必要である。

②学校評価アンケートの比較による分析

生徒による学校評価アンケートの比較は以下のとおりである。

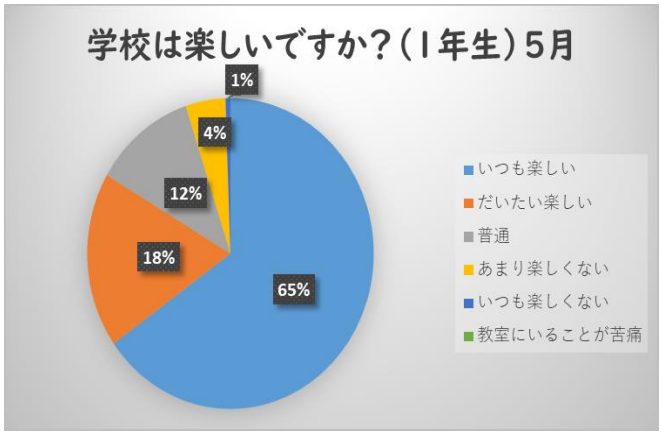
	後期		前期	
祇園中学校はいじめを許さない雰囲気があり，生徒が安心して生活することができる学級・学年・学校になっている。	A	72.7	A	75.8
もし，いじめが起こったとき，先生達は対応や解決に向けて親身に取り組んでいる。	S	82.7	S	83.8
担任の先生に限らず，部活動顧問の先生や教科担任，学年の先生など，多くの先生と会話できている。	A	75.7	A	75.4
悩みや心配があるとき，先生に話を聞いてもらったり，相談することができている。（教育相談の時間に限らない）	S	81.7	A	79.0

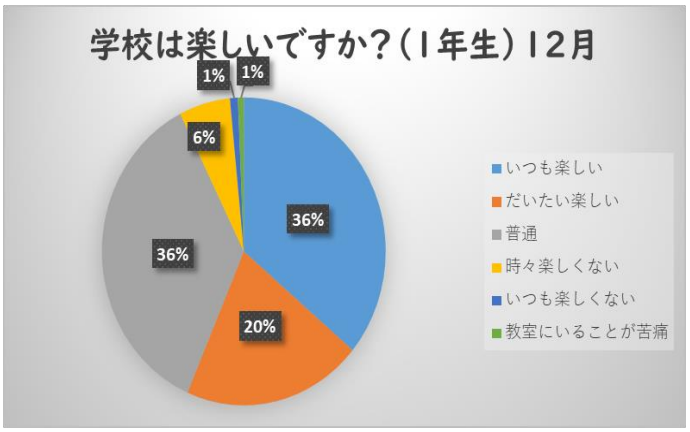


いずれの項目も年間を通してＡ評価以上の評価となっている。悩みを抱えた時に相談できるの項目の評価が上昇していることが分かる。様々な取り組みを通して教師と生徒が人間関係を築き「相談できる」関係を作ることができていることが分かる。

③生活アンケートの比較による分析

１年生の5月と12月の生活アンケートの中の「学校は楽しいですか」の項目を比較した。

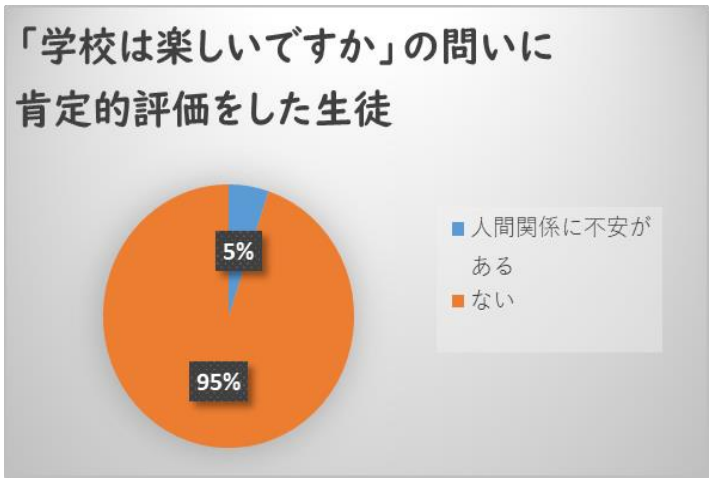


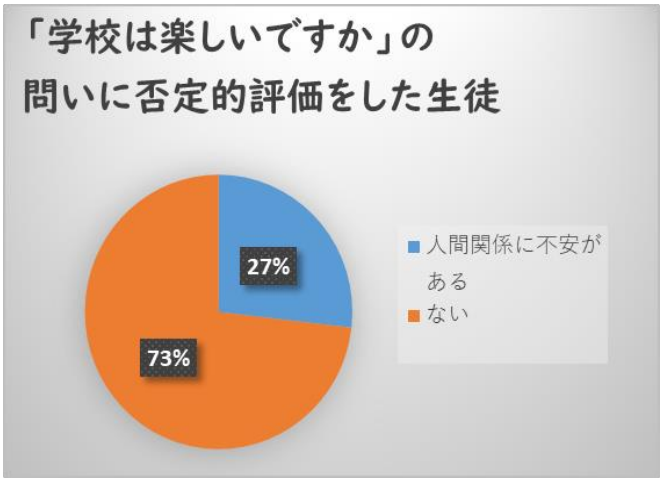


「いつも楽しい」「だいたい楽しい」の肯定的評価を比較すると5月は83%であり、12月は56%と変化した。「普通」と答えた割合は5月が12%であり、12月は36%であった。否定的な評価は5月が5%であり12月は8%であった。否定的な評価の中で「教室にいることが苦痛」とした生徒は5月にはいなかったのに対し12月は1%の生徒がいた。12月のア

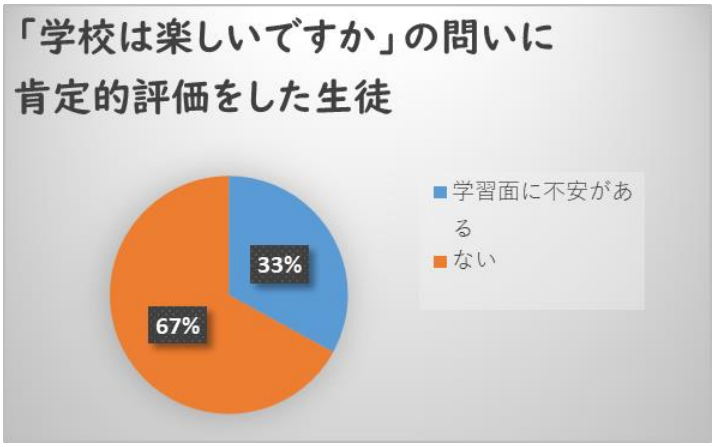
ンケートではどのような悩みがあるのか、さらに細かくアンケートを行った。それらの項目を大きく括ると「人間関係に関する不安」と「学習面に関する不安」の二つに分けることができる。これらの結果を、登校することに対して「肯定的な評価をした生徒のグループ」と「否定的な評価をした生徒のグループ」を比較すると次のようになる。

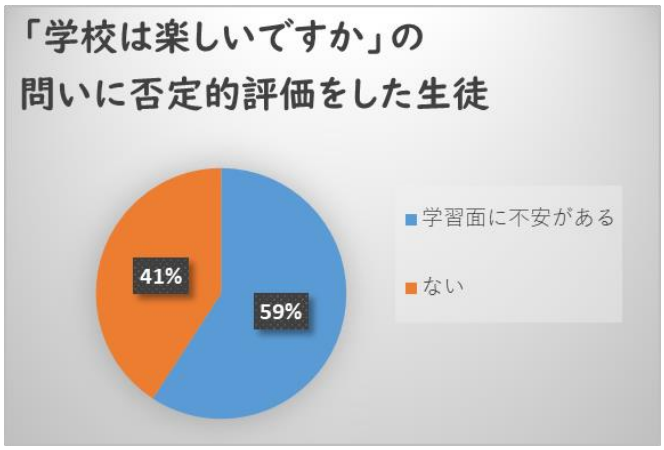
人間関係に関する不安の有無





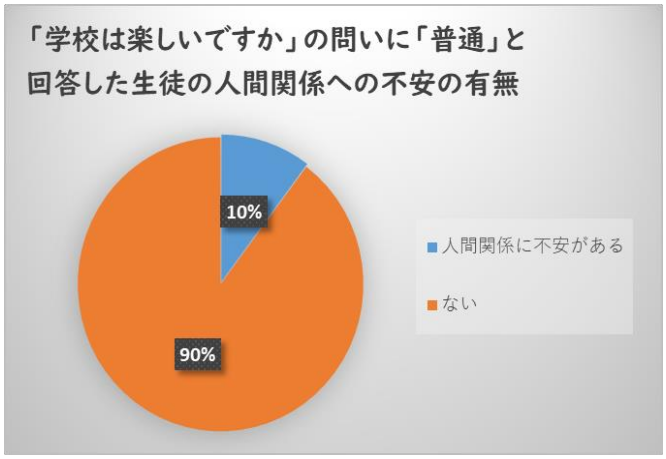
学習に関する不安の有無

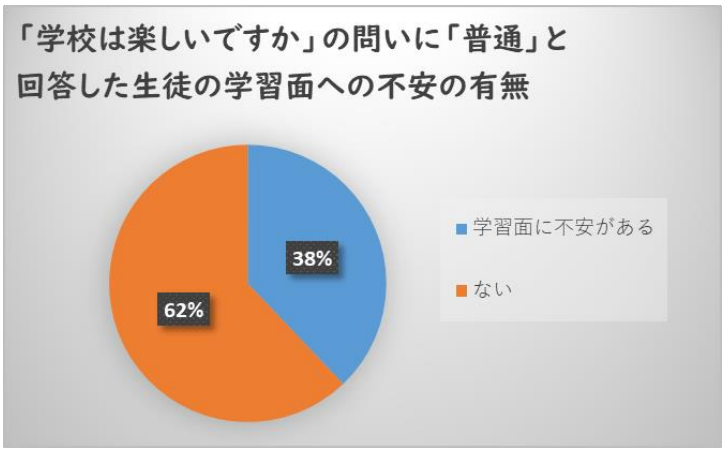




アンケートの結果から分析すると「学校に来ることは楽しい」の項目に対して肯定的な評価をした生徒のグループは、人間関係や学習に関する不安を持つ割合が低いことが分かる。特に学習に関しては大きく差ができている。

次に「学校に来ることは楽しい」の項目に対して「普通」と答えた生徒のグループの割合を示す。





「普通」と答えた生徒のグループは中間層であると考えられるので、これらの生徒がどちらになるのかによって学年集団の質は変わってくる。人間関係の不安を解消していくための取り組みである、ライフスキル学習をより深化させていくことが次の課題である。また、学習面の不安の解消のための取り組みも必要である。一日の中で一番多くの時間を占めている授業の中でしっかりと学力および人間関係作りについて取り組んでいくことが課題であることが分かった。

また、前述の「教室にいることが苦痛」とした生徒には担任がすぐに声掛けや教育相談などおこなった。

④ふれあいひろば・Ｇルームの利用アンケートの分析

ふれあいひろば･Ｇルームを利用する生徒は単に人数の増減だけでは評価ができない。そこで生徒にアンケートを行い評価をすることにした。

項　　目	肯定的評価割合
１　ふれあいひろばでは安心した気持ちですごせていますか。	１００％
２　ふれあいひろばはあなたにとって居場所になっていますか。	１００％

また、そう答えた理由について、選択肢から選んだ割合は次のようになっている。

項　　目	選択割合
無理に人と関わらなくてよい。	８８％
滞在時間が短くてもよい。	７０％
自分のペースで学習できる。	７０％
登校時間を自分で決められる。	７０％
安心できる。	６４％
人数が少ない。	４７％
自分のペースで人と関われる。	２３％
落ち着いて給食が食べられる。	１１％
その他：自分の好きなことができる。	４％

ふれあいひろば利用生徒は他人の視線や、他人とのかかわりが苦手であることがよく分かる。そういった生徒たちがまずは安心してふれあいひろばを利用し、気持ちが安定した段階で他者との関わりができるような取組に引き込んでいくことが必要であることが分かる。個々それぞれの状況をしっかりと見ていき適切なタイミングでアプローチすることが大切である。

次に、ふれあいひろばでの学習支援については3年生を中心に特に単元テストや漢字テスト、聞き取りテストなど定期テスト以外の評価に関連するテストができる点が良かったという意見が多く見られた。また、Ｇ ルームを利用したふれあいひろばの生徒は、「小学校で習うことやプリントでの自主勉の方法などいろいろなことを分かり

やすく説明してもらえる」や「自分のペースに合わせて自分のレベルで教えてもらえることができるのでとても助かっている」という点を感想としてあげている。登校できず授業についていけないから、ますます学校から足が遠のくという生徒への適切な支援の方法となっている。

⑤「生徒理解」に関わる教師の研修会の実施回数

計画通り実施することができた。「4 具体的取組」の項にある通り、生徒を理解する新たな視点および方法を獲得できた。

６　研究成果

（１）　取り組みの成果

本校は2年間研究指定校として取り組みをすすめているが不登校生徒数の減少だけを目標に掲げているわけではない。ふれあいひろばの利用人数は年々増加しているが、それはふれあいひろばという場所や学校が苦手な生徒が世の中に認知されてきた結果ともいえる。また、ふれあいひろばに登校することで学校とのつながりを継続することができているともいえる。

文部科学省から出された「COCOLO プラン」では「誰一人取り残されない学びの保障」を中心に個々の現状に応じて学べるようなシステムづくりを目指している。そういった点から考えると本校が進める不登校生徒への学びの保障である、ふれあいひろば独自の学習プラン、G ルームでの学習支援、ふれあいひろばと G ルームの連携による学びなおし等はそれにあたる。集団が苦手で少人数で活動することで安心するタイプの生徒に対してのこれらの取り組みは一定の成果があった。

ふれあいひろば利用人数の推移

	１年	２年	３年	合計	ふれあい利用生徒のうち、欠席が３０日以上の生徒数	不登校生徒数
Ｈ３０				10	0	22
Ｈ３１	9	1	5	15	2	29
Ｒ２	10	7	5	22	13	43
Ｒ３	5	12	11	30	20	40
Ｒ４	8	9	15	32	23	69
Ｒ５（Ｒ６年1月現在）	9	13	17	39	26	77

次に、今年度始めた小中連携が成果として挙げられる。小中学校9年間のライフスキルの計画を立てられるように連携をした。また、担当者間で行き来をしたり情報交換を行ったりすることができた。生徒指導主事の会に参加することで中学校区すべての小学校の不登校生徒の様子を把握することができた。

また、卒業生に来てもらい、高校の様子について質問をしたり話を聴いたりする「卒業生と語る会」を開くことができた。これも成果の一つである。継続していきたい。

（２）　課題

不登校生徒数の減少だけを目標に掲げているわけではないとしているが、教室に行きたいのに行くことができない生徒にとっても自分の学級が居場所となるような学級づくりを行っていくことが教師側の課題である。

昨年度ふれあいひろばを利用していた生徒で今年度年度替わりに教室に復帰した5名の生徒にアンケート行った。そこで、教室に復帰ができた理由について聞いた。これによると、全員

教室に行けるようになった理由

友達の存在	5
担任の先生	2
今のクラスが自分に合っている	1
行事がしたい	1

の生徒が現在のクラスで安心できていると答えている。さらに、安心できる理由を聞くと、「人間関係における安心感」が教室で過ごすことができる要因として大きいことが分かる。また、具体的な理由については一番仲がいい友達以外のクラスメイトとの関わりやすさや、クラスの雰囲気を挙げている生徒が多かった。これらのことからも誰にとっても自分の教室が居場所となるような学級風土の醸成が必要であることが分かる。

また、こういった学級風土をつくるために、一日の中で最も長い時間を占める授業で関わり合いの機会を作っていくことが必要であると考えた。研究部と協力し授業の中で仲間づくりを進めていく予定である。また、学級づくりについて学ぶ機会を作るために、学級づくりの研修会など教師の質を向上させるような研修会を計画的に行っていく。

さらに、学習に対する不安を感じている生徒のために生徒にとって安心して学習ができる環境づくりが必要になる。そのために、放課後の絆学習会の再度おこなうなど、頑張りたいけれどどうやって勉強したらいいか分からない生徒たちを取りこぼさないようにしていくような取組を行っていきたい。

最後に、ふれあいひろばから教室へ復帰した生徒が、人権作文の題材としてふれあいひろばで過ごしていた自分をふり返り帰った作文を書いてくれた。その中には「私がしてもらったように、子どもでも大人でも、他の人の頑張りや努力していること、一生懸命になっていることを認めて『頑張っているね』と声をかけ伝えることで、小さなことでも誰かの心に明るい光をあげられる、そんな優しい世界になるのではないか」とある。「学校に行き教室で授業を受けること」を当たり前のこととせず、その頑張りを周囲が認め言葉にしてほめ励ますことで小さな自信の積み重ねになり、教室に復帰できたと答えてくれた。私たち教師にできることは、そういう姿勢で生徒に向き合っていくことだと感じさせられた。